

はじめに

脳科学や遺伝学の進歩にともない、「氏か育ちか」の議論に終止符が打たれることになった。遺伝あるいは環境いずれかの単純な影響ではなく、成長発達の過程で互いに影響しあって子どもが育つ道筋が示されている。また脳科学では、胎児から成長過程にある脳のダイナミックな機能の質的变化に、環境が影響することを証明している。

そこで改めて、「子どもを取り巻く環境」への関心が高まっている。すなわち、複雑な過程を経た相互作用が影響を及ぼすからこそ、より最新の知見に基づく子育て環境の情報は貴重であり、かつ根拠に基づいた形で実践に役立てる必要がある。

子どもにとって望ましい環境、すなわち望ましい子育て環境とは何であろうか。ここでは、ひとりひとりの子どもの力を最大限に引き出し、生き生きとした子どもの育ちをはぐくむ、すなわち「子育てをエンパワメントする環境」と考える。それを支えるのが「子育て支援」であり、実現するための保護者へのサポートが「子育て支援」である。子どもがすこやかに育つ「子育て環境」整備は、私たちおとなのもっとも重要な役割のひとつである。

一方、虐待予防に向けた支援の充実は喫緊の課題である。新生児の全戸家庭訪問などにともない、家庭訪問により把握した情報を科学的な根拠に基づき支援に活用する方法が求められている。

私たちは25年にわたり、日本の子どもの環境とその発達への影響について、国際比較できる形で研究成果を積み上げてきた。本書は世界100か国以上で活用されている養育環境評価 HOME (Home Observation for Measurement of Environment) をもとに、日本の現状に合うよう標準化した「子育て環境評価」を用い、支援設計と根拠、活用方法をわかりやすく解説したものである。

数多くの研究成果が、子どものすこやかな成長には、子どもへのかかわりの質と量が強く関連することを実証している。専門職が本書を活用することで、「子育て・子育てを支える」「子どもとのかかわりの“質”を向上する」「多様なニーズに対応可能な“質”の高い子育て環境を整備する」支援に役立てることができる。

本書の特徴は、以下の3点である。

- 1) 実証的な追跡研究に基づき、科学的な根拠を踏まえている点
- 2) 実際に利用する保護者と子育て・子育て支援専門職の意見に基づいている点
- 3) わかりやすい評価指標と具体例をあげ、望ましい子育て環境の目安を提供している点

本書は、日常的な子育て支援、子育て支援で簡単に活用できる「子育て環境評価」の枠組みと方法について、具体的に解説したものである。

構成は、第1章で「子育て・子育てエンパワメントと支援」として子育て・子育てエンパワメントの意味、子育て環境を把握する意義、家庭訪問の有効性を最新の発達保健学、脳科学、教育学、心理学などの知見をもとに整理した。

第2章では「子育て環境評価の内容」として基本的な考え方と枠組み、評価内容を紹介した。

第3章では「子育て環境評価の実施方法」として具体的な実施方法、評価方法、子育て支援票の活用、エンパワメント支援設計の方法を概説した。

第4章では「子育て支援実践例」として育児困難、虐待傾向、発達障害、経済的困難などの事例をもとに、1) エンパワメント支援設計、2) ツールの活用と具体的な方法、3) 成果とツール活用の有効性、4) ツール活用のポイント、の共通の枠組みを設定し、わかりやすく活用法を説明した。

第5章では「今後の展開に向けて」として展望を述べた。

子育て・子育て支援に携わる保健師、保育士、幼稚園教諭、心理士、ソーシャルワーカー、家庭相談員、教師、医師、看護師など支援専門職、研究職、行政職などが、保護者とともに根拠に基づくケアの展開に向け、実践の場で早期発見、早期支援につながる有効な評価指標として、あるいは研究ツール、学習ツールとして、今後の活用を大いに期待する。